



民間説話と場所のセンス：兵庫県の蛇髻入・苧環型 を事例に

佐々木, 高弘

(Citation)

兵庫地理, 45:13-21

(Issue Date)

2000-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002425>



民間説話と場所のセンス —兵庫県の蛇蛭入・苧環型を事例に—

佐々木 高弘

1. 場所のセンスとフォークロア

人間が環境を読み解くときに発揮する能力、ここではこの力を「場所のセンス」と呼ぶ¹⁾。たとえば、個人が部屋の中の家具をどう配置するか、あるいは自身の土地にどのような建築物をどのような場所に建造するのか。人々がどのような場所にどのような形態の集落をあるいは都市を計画し形成するのか。これら人々の行為は特定の環境を眼前に、それらを読み解くことから始まる。そして人々は安息の場を獲得するのである。

ところが私たちは、普段この「場所のセンス」を意識することはあまりない。なぜならあまりにも常に、私たちはこの「場所のセンス」で創り上げた、私たちの場所に接しているからである。しかし何らかの出来事を機にこの場所を失ったとき、「場所のセンス」が日常のありふれたものでありながら、いかに重要な感覚であったかが分かるだろう。自分の場所が回復できない場合、自身の回復も不可能なケースさえあるのだから。

異なる文化の場所を訪ねたときも、私たちはこのセンスに気づくことがある。異なる文化を持つ人の家を訪問したときでも、異なる文化を持つ人々の集落や都市を訪ねたときでも。もしそこにある種の違和感を感じたのであれば、それがそうなのだ。そこでやっと私たちは、自文化の「場所のセンス」で異文化の場所を無意識に読み解いていることに気が及ぶのである。私たちの「場所のセ

ンス」の背景には、このように今まで先祖が蓄積してきた生活様式や行動様式の体系、自然環境に対する適応の体系、あるいは観念体系、象徴体系としての文化²⁾がある。

ここではその「場所のセンス」の背景にあるものの一つとして、フォークロアを考えてみる。なぜならフォークロアには、地域の自然環境と密接に関わった人々の生活様式や行動様式、観念体系や象徴体系が豊富に詰まっているからである。そのフォークロアをテキストとした「場所のセンス」とはどのようなものだったのだろうか。

2. 民間説話の分類

フォークロアのなかでもここでは民間説話をとりあげる。民間説話とは民間に口頭で語り伝えられている神話・伝説・昔話などという。これら説話に共通する特徴は、①話に類似性がある、②伝承性がある、③文芸性がある、④同じ話が特定の地域だけでなく複数の地域で発見される、などがあげられる。

異なる点は第1表のようにまとめることが出来る。これら三者の成立関係や先後関係に関しては民俗学においても重要な問題である。たとえば、柳田国男は「伝説・昔話は神話の零落であり、それぞれに展開した³⁾」と考えた。つまり神話が先にあって、それが権力や

第1表 神話・伝説・昔話の特性

	話の内容	当事者の態度	機能	時間	場所	人物
神話	神々が中心	疑ってはならない	権力	太古	特定	特定
伝説	妖怪が中心	真実性を主張	歴史	特定	特定	特定
昔話	人間が中心	フィクションとして	娯楽・教訓・しつけ	ある時	あるところ	ある人

信仰を失い零落したのが伝説や昔話ということになる。この表でいえば神々は妖怪へと零落し、ついには話題の中心からも外れてしまう。疑ってはならない神々は、人々が半信半疑のなか本当を主張しなければならない存在となり、ついには虚構へと。さらに生きた権力は歴史となり、娯楽や教訓へと。これが柳田の考え方である。しかし必ずしもそうでない場合もある。福田晃は「伝説・昔話は神話伝承と密接にかかわりながら、それぞれの独自の思想・主題のうちに存在し、神話の派生・分化とするのは、一種の進化主義⁴⁾」と批判する。

このように、これら三者の関係は民俗学においても難しい問題を孕んでいるのだが、これはあくまでも研究者の側の分類であるにすぎない。民間説話は基本的にはある特定の場所に住む人々が語り伝えてきた説話である。つまりそれを語る人々である当事者が民間説話の所有者なのである。その当事者とそれぞれの民間説話との関係をぬきにするのであれば、そこに「場所のセンス」はありえない。なぜなら彼らの「場所のセンス」を民間説話に見いだそうとしているのだから。

当事者という点からいえば、神話は疑ってはならない真理である。そもそもこの真理を説話と考える当事者はいない。伝説でも当事者は真実性を主張する。このニュアンスは微妙だが、ようするに、熱心に真実性を主張しなければならないのは、信じない人も傍にいうことだろう。昔話はあたまから誰も信じていない。この点からいえば、当事者にとってこれら説話群には、「本当の話」と「うその話」といった程度の区別しかないわけだ。この区別は私たちの所有する話にも通用する。なぜなら私たちも私たちの所有する話の当事者だからである。こう考えると、民俗学者や文化人類学者の民間説話の区別は研究者の独りよがりに見えてくる。ところが逆に考えることも出来る。それは私たちの所有する「本

当の話」も、第三者から見れば神話や伝説かもしれないという思考の逆転である。しかも「うその話」と非常に似通っている。とすれば、ある意味で本当とうその区別それ自体が非常にあやういものだということも。

こういった認識を前提に考えてみれば、私たちの文化も神話的であり、それに基づいた場所づくりも虚構の具象化だったのかもしれない。「場所のセンス」とはこの辺りを微妙に浮遊する目に見えない無意識の感覚なのだろう。興味深いことに民間説話は、私たちから見たら荒唐無稽な説話であっても、当事者にとっては本当であつたりうそであつたりする、そういった人々の無意識の態度を明確に示すフォークロアなのである。当事者には見えない「場所のセンス」が、そこに見いだせるかもしれないし、私たちのそれもそこから類推することができるかもしれないのである。

3. 無意識のシンボリズム

神話と言えば世界を創造した神々の話が、伝説と言えば河童や海坊主など、昔話と言えば桃太郎や浦島太郎の冒険を思い出す人も多いだろう。全く別々の種類の話と思われるかも知れないが、先にも述べたように民俗学や文化人類学ではこれらは密接に関連しあっていると考える。同様にこれら三者に通底するシンボリズムを見いだそうとする分野もある。

宇宙全体の存在にも根本的に関連する、自然や人間の起源という全くの謎について、古来人々は様々なモデルを無意識の力によって提示してきた。このような世界創造神話には次のようなシンボルが見いだされる。たとえば「ウロボロス」というシンボルがある。このシンボルは多くの場合、自分の尾をかむ蛇ないしは龍の姿で示され、未分化なもの、全体性、始源的統一、自己充足を象徴する。ウロボロスは自分で自分を生み出し、結婚させ、妊娠させ殺す。古代ギリシアの地図では未知の領域として四隅に描かれ、仏教やヒンドゥー

一教では輪廻の輪を象徴する。風水思想でも四隅に位置する神として青龍が登場することはよく知られている。人類はこのような未知の謎に直面すると、いつも類似する神話的なシンボルを未知の領域に投射してきた⁹。

世界創造に関するシンボルは他にもある。たとえば宇宙軸（アクシス・ムンディー）のシンボルとして、宇宙樹、世界山、世界の柱、紡錘、糸、洞窟などもあげられる。宇宙樹や世界山、柱はかつては天と地がつながっていた名残として神話に登場することが多い。宇宙樹「からは神の知恵を、世界山あるいは宇宙の柱を登れば神の助言を得ることが出来たのである」¹⁰。紡錘は宇宙の循環運動を象徴し、糸は神によって紡ぎ織られる運命・統一・持続として、宇宙を束ね宇宙を織りなすもののシンボルとなる¹¹。洞窟もまた世界の中心のシンボルである。洞窟は山の一部として、また宇宙軸としての山の象徴的意味をも含む。また神婚の行われる場所をも象徴する¹²。神婚とは神と神あるいは神と人との結婚を意味する。ウロボロスはここにも関わる。ユングが重要な象徴として考えた錬金術においても神婚は重要なシンボルである。異質なものの同士の結合は新たな物質を生み出すという神婚の意味は、化学実験へと引き継がれる。化学実験がまだ未知の領域であった頃、ここでもウロボロスがその「異質なものの結合＝神婚」を象徴したのである¹³。

深層心理学ではこういった人間の深層心理に共通するシンボルが、世界中の神話や伝説、昔話など民間説話に無意識にあらわれると考えた。民間説話はこのような普遍的な要素も持っている。それが文化や時代や民族を越えて登場するわけである。次にこれらシンボルが投射された日本の民間説話をながめてみよう。

4. 「蛇蛻入・苧環型」のシンボリズム

次にあげる民間説話は兵庫県美方町小代で

採集された昔話である。

昔ある時、まんようさ2階えに寝とる娘のとけえ男が通うてくるだそう。親等あが見ると大うけな蛇がドテンドテンと厩座敷のとうあがるでえ、娘え「お前えわりゃあ蛇い眼えかけられて、いかな晩もいかな晩も蛇が来るだあなえかいや」と、娘あ蛇だとは知らんで「そぎやえなこというてくれな。ええ男が来よるだに」というて怒るだそう。母親が「そぎやえ腹が立ちやあ、針い長え長え糸うつけて、その針いたぶさえ刺うててみい」とて教えたさう。その夜うさ、娘あいわれたようにして、あけの朝ま起きて母親といっしょえ糸う伝うて行くとう、山奥の大うけな岩の穴え入ってくじむいとるだて、そしてえ、母親らしい声で「わりゃあな、人のいうこと聞かんと、人間に眼えかけて、こんなこてえなつて命いおとすだわい」というと「うらあ、うらの命やのうなつても、子どもうじょうさん孕ませとるで、命やあおしゆなえ」とい。母親が「そぎやえなこというんだけど、人間ちゅうもんは利巧なで、三月にゃあ桃酒えのむし、五月にゃあショウブ酒、九月にゃあ菊酒飲むで、われが子はみんな溶けて出してしまうわい」とて言うて聞かせよるで「こりやあええこと聞いた」と思つて、戻つてその通りいしたら何のこたあなかつたげな。それからあ、おなごあみんな節供のおみきい飲むだとや¹⁴。（第3表の5）

この昔話を日本民俗学は「蛇蛻入・苧環型」と分類している¹⁵。苧環とは紡いだ麻糸を巻いて玉にしたものである。それに針をつけて夜やってくる男に付け正体を知る説話をこのように分類している。糸のシンボリズムは先に述べたが、本質的な象徴的意味は仲介者である。糸はこの世とあの世の存在者を結びつける。異質な両者を結びつけるには糸を辿っていかねばならない¹⁶。日本のこの昔話レヴ

エルにおいて

第2表 兵庫県の「蛇髣入・苧環型」伝説一覧

は蛇と人間の娘だが、神話レベルにおいては神＝ウ

No.	伝承地	来訪男	来訪男の棲家	話型	娘の家	記念物	節句	時代
1	千種町奥西山・岩野辺	大蛇	小河内山の七本スギ 小河内川の蛇測	苧環・立ち聞き・ たらい子型	岩野辺のキトラ家	忠佐護神社・お花 屋敷・花藤の墓	薑蒲酒(鉄漿汁)	7世紀後半～8世紀
2	大屋町若杉	龍	沼谷の沼	苧環型	小畑家(庄屋)			～江戸期?

ロボロスと人間の娘の神婚ということになる。そして糸の行き着く先は山奥の岩穴、ようするに洞窟である。先のシンボリズムでいえば世界山、宇宙の軸を意味し、多くの神話ではそこには神がいる。神によって選ばれた私たちの代表は、そこへ登り神の助言を得ることが出来るわけだ。ここでは立ち聞きという形¹⁴⁾で描写されるがこれがその助言だろう。その証拠にここで立ち聞きした話が、節供の儀礼の由来となっている。

ところで先の民間説話の三者の関係を思い起こすのであれば、日本にもこのような神話がありそれが権力と結びついていったことになる。『古事記』の崇神記の三輪山説話は次のような内容である。「イクタマヨリビメのもとに男が毎夜訪れ、ヒメは妊娠する。怪しんだ父母が尋ねると、娘は姓名も知らぬ男が通うことを告げる。父母は男の素性を知ろうと、赤土を床の前に散らし、紡いだ麻糸を針に通して男の衣の裾に刺せと娘に教える。夜明けに見ると、糸は戸の鉤穴を通り出て三輪神社に至っており、男の正体は三輪の神と知れる。この神婚によって生まれた子どもの裔がオホタネコである¹⁵⁾」蛇体の神は大物主神、イクタマヨリビメは大物主神の妻、オホタタネコはその子であり三輪君の祖である。そのオホタタネコが崇神天皇の下、三輪山の神を祭ることで疫病がおさまる。紀によるとその後崇神天皇は四道に將軍を遣わし初めて日本を支配した「ハツクニシラス」天皇となる¹⁶⁾。これを素直に解釈するのであれば、初めて国土を支配した最初の王が先の世界創造のシンボル群をわが国でも使っていたことになる。まさに「ある国土への定住は世界創建に等しい¹⁷⁾」のである。

5. 真実と虚構の場所

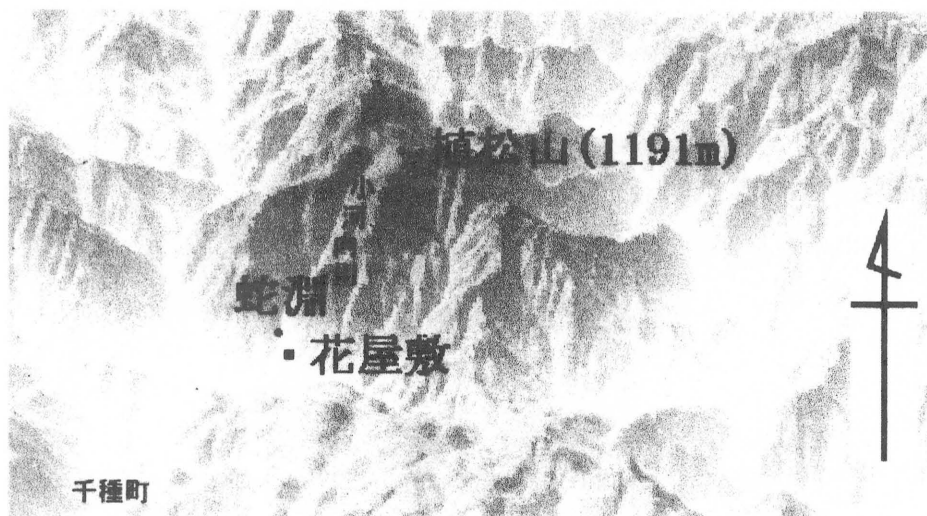
私たちにとって二つの同じ虚構も、当事者から見れば、神話は疑ってはならぬ真実であった。もちろん同じ話型の昔話と神話を並べて比較することはなかっただろう。とはいえ先の柳田の「伝説・昔話は神話の零落であり、それぞれに展開した」という説によれば、昔話ももとは神話であった可能性が出てくる。しかし真実と虚構とをになう両者の隔たりはあまりにも遠い。跡を追うのであればその中間に位置するものが欲しい。それが伝説なのである。

ところで伝説が昔話と大きく違うのは、たとえ同じ話型でも人物や時代や場所が特定される点にある。この特定が虚構から真実へと人々を誘う。兵庫県千種町の伝承を見てみよう。

昔、小河内山の七本スギの大蛇が、岩野辺のキトラ家の娘に懸想し、夜毎若武者姿となって訪れた。これに気付いた母親お藤は、若武者の正体を見届けるため、紡ぎためた麻糸を針に通し、娘に意を含めて、その針を若武者のはかまに刺させた。翌朝その糸を頼りに小河内川の測(蛇測)に行き、水底から聞こえる会話によって、若武者は大蛇で鉄の中毒により死に瀕しており、娘は妊娠中で、もし節供のショウブ酒(一説にカネ=鉄漿汁)を飲まねば、何百の子が生まれることを知り、急ぎその手当をすると、娘は数日後に7タライ半(一説に8匹)の子を死産して果てた。この母娘の墓は花藤の墓といい、キトラ家の屋敷跡はお花屋敷と呼ぶ田である。なお、死産した大蛇の子は、忠佐護神社として祭り、その霊を慰めている¹⁸⁾。(第2表の1)



第1図 千種町岩野辺の「蛇簪入・苧環型」伝承図



第2図 千種町岩野辺の2万5千分の1数値地図の3D化図

先のシンボル群が現実の景観へ投影されたのである。娘の家も蛇の棲家も立ち聞きした場所も特定されている。また祠や墓、そして地名なども事実を主張するための証拠物として伝承されている。これらはこの伝説の伝承地においてまだ記憶されてさえいれば、地図上で提示することができる。第1図は伝承者たちの記憶に基づいて作成した。小河内山というのは小河内川周辺の山を漠然というらしい。七本スギは植松山(第2図)にあると記憶する伝承者もいた。花藤の墓は圃場整備で埋めてしまったという。蛇淵は今もあるが

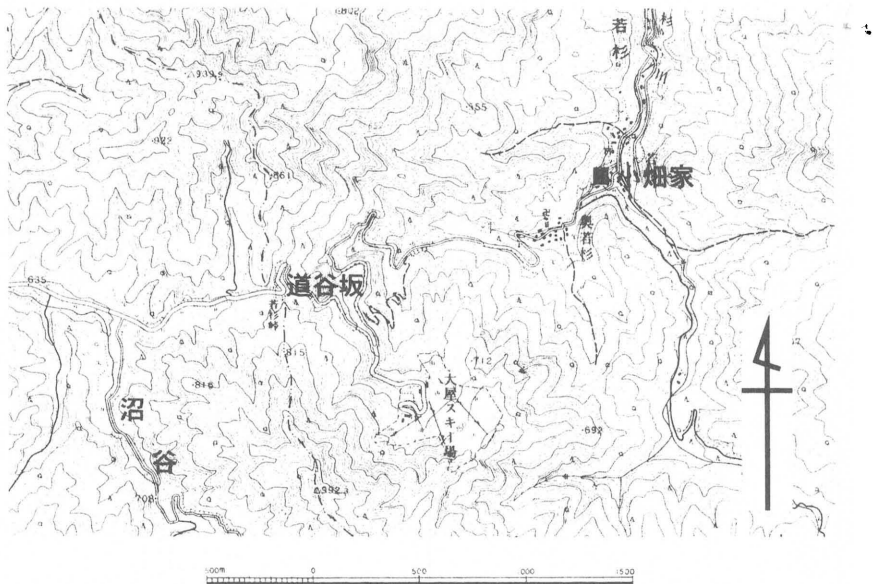
つてのように深くはない。忠佐護神社はかつては蛇淵のそばにあったが、明治の洪水で現在の所へ移動させている。

先の神話のシンボリズムや三輪山説話がここでも有効であるのなら、次のように考えることが出来る。キトラ家の始祖がこの千種の岩野辺という未知の領域に侵入あるいは開拓したとき、このシンボル群をテキストにこの地域を支配した。ここでも人類は未知の領域に接したとき同じシンボルを現実空間に投射したのである。異なる世界の異なるものがウロボロスを介して神婚する事によって、新し

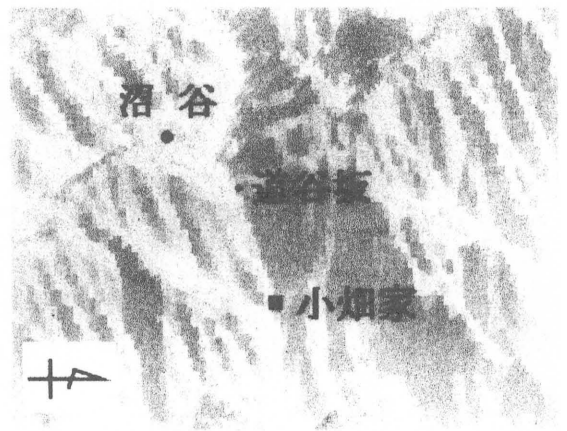
い世界が創建されるという。神話は疑うことができない真実である。この支配者が没落しないかぎり、神の子あるいは土地の神を祭る権力は否定できなかったろう。

現在の伝承者はもはや意識してはいないが、このテキストにしたがえば小河内山、植松山、あるいは七本スギは、宇宙軸である世界山あるいは世界樹ということになる。それらを媒体に神々の声が人々に伝えられる。彼らはこの自然環境を眼前にそう見立てたわけである。つまり特別な山であり樹なのである。ところが第2図の3D化した地形図を見れば分かるとおり、これらは平野に孤立する山や樹のように目立つ存在ではない。数ある山や樹のなかからなぜこれらが選ばれたのか。私たちはこの民間説話を事実と思えない文化に属しているため、このシンボル群が投影された場所や景観の意味を読み説くことが出来ない。しかし地域支配に関わるのであるから、ある時代のある特定の集団が共有した、場所や景観の意味を読みとる文法がここにあったわけだ。

神話は時代を経て伝説へと変化した。蛇は針の毒で死に、娘は蛇の子を死産している。また三輪山説話にはない、「測」での儀礼の由来の立ち聞きがここでは加わる。第3図は大屋町の伝承¹⁹⁾を図化したものである。ここでもウロボロスは沼からやってくる(第2表)。しかし第4図の3D化した景観図をみればその谷を巻き込む山がある。この伝承では山は語られないが、かつてはこの山が世界山だったのだろう。このように最初は山に神がいたのが伝説に零落することによって場所も測や



第3図 大屋町若杉の「蛇髻入・苧環型」伝承図



第4図 大屋町若杉の2万5千分の1数値地図の3D化図

沼へと零落したのであろうか。そうであれば私たちの祖先は民間説話の内容と景観や場所を対応させていたことになる。テキストが変われば場所の配置も変化する。それを仲介したのが彼らの「場所のセンス」であったのではないか。

6. 兵庫県の「蛇髻入・苧環型」

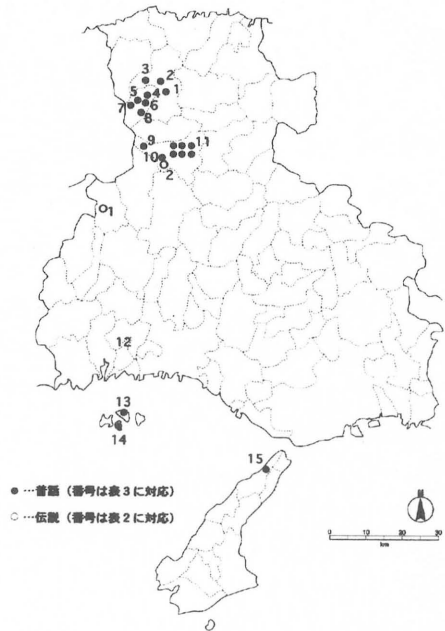
神話が零落し伝説となり、そして昔話となった。この仮説がどこまで多くの民間説話にも当てはまるのかは知らない。が、「蛇髻入・

第3表 兵庫県の「蛇簀入・苧環型」昔話一覧

No.	伝承地	蛇の棲家	娘の家	解決	儀礼	話型	来訪男	教訓
1	村岡町長坂	洞穴/山	長者	母の助言	桃酒・菖蒲酒・菊酒	苧環・立ち聞き型	長者の若	
2	村岡町川上	岩穴	娘	親の助言	桃酒・菖蒲酒・菊酒	苧環・立ち聞き型	侍	
3	村岡町熊波		娘	娘の機転		退治・たらい子型	冷たい男	
4	美方町小代	山	娘		節句の御神酒	立ち聞き型		女は山で寝てはならない
5	美方町小代	岩穴/山	娘	母の助言	桃酒・菖蒲酒・菊酒	苧環・立ち聞き型	美男	
6	美方町小代		娘	母の助言		苧環型	男	女はおはぐろを塗る
7	美方町秋岡	洞穴/山	娘			苧環・立ち聞き型	男	
8	美方町新家	岩穴/山	娘	親の助言	節句酒	苧環・立ち聞き型	美男	
9	大屋町横行	池	娘	母の機転	桃酒・菖蒲酒	苧環・立ち聞き型	美男	
10	大屋町栗ノ下	岩屋	娘	母の助言		苧環・立ち聞き型	美男	女の子のしつけ
11	大屋町筏					苧環型		
12	揖保郡	淵	長者	乳母の助言	菖蒲湯	たらい子型	侍	
13	家島町真浦	田	娘	母の助言	菖蒲湯と菖蒲酒	苧環・たらい子型		女の子のしつけ
14	家島町坊勢	穴/山	娘	母の機転	菖蒲湯	苧環・立ち聞き・ たらい子型		
15	北淡町野島	池/山	娘	母の助言	菖蒲と蓬と茅の湯	苧環・たらい子型	侍	

苧環型」がもっともうまくこの仮説を受け止める民間説話であるといわれている²⁰⁾。第3表は兵庫県で伝承されている「蛇簀入・苧環型」の昔話の一覧である²¹⁾。この仮説が正しいのであれば、この昔話の多くが神話であった可能性が出てくる。つまりフィクションが真実であった可能性が。第5図はこの伝説、昔話をあわせた分布図である。もはや神話は伝承されていない。伝説も二つしかない。民間説話の分布図は、伝承があることは証明できてもないことは証明できない。その他の地域で聞き取り調査を行えば、いくらでも出てくる可能性もあるのだから。ここでは兵庫県の分布図しか示していないが、西の鳥取県や岡山県にも東の京都府にも同様の伝承が多く残されている。このように見るとある時期この「場所のセンス」のテキストがあちこちで使われたということになる。

先に伝説は時代も特定するといったが、岩野辺の開拓時期とキトラ家の関係は判然としない。ただ岩野辺には金屋子神が高天が原より降りてきたという伝承²²⁾がある。金屋子神とはタタラの神である。この伝承によりこの



第5図 兵庫県の「蛇簀入・苧環型」分布図

地はタタラ発祥の地ともいわれている。実は三輪山の麓にも金屋という地名がある。このことから、この三輪山説話をタタラ集団の所有とする説もある²³⁾。『播磨風土記』にもこの地で鉄生産が実施されていたことを示す記事²⁴⁾があり、8世紀にはこの地がタタラの生産

地として開拓されていた可能性がある。この伝説はタタラ集団がこの地を開拓したときに使った神話だったのかもしれない。

関連はまだある。岩野辺小河から7世紀後半と考えられる須恵器が出土している点である²⁵⁾。三輪山説話で語られるオホタタネコは河内の陶村から来たとされている。そのことからこの「芋環型」の伝承が須恵器製造に関わる集団の始祖伝承でないかとする説もある²⁶⁾。先の崇神天皇は4世紀から5世紀の大和の王権の長とされている²⁷⁾。記紀の記述ではある意味で色あせた神話となっている²⁸⁾ことから、7世紀にはこの神話は特権をすでに失い、地方へと受け渡されていったのかもしれない。その痕跡を千種町に見いだせないか。

もう一つの伝説、大屋町のものはかなり原型を失っている。男が娘の家に通うのではなく、娘が籠のもとへと通うのである。しかし糸でその棲家を探し当てるのは同じである。このタイプの話は紀伊半島でよく聞く。娘は糸引き娘で小畑という家に雇われている。聞き取り調査によると、この小畑という家は屋号を糸屋といい庄屋である。権力者であることは同じである。このように零落しつつも神話をおおわせる数多くの要素を残している。

このように伝説は時代もある程度特定できるため、どの時代の「場所のセンス」のテキストであったかが憶測できる。古代にはこのテキストが兵庫県に伝播してきていたと言えるのかもしれない。そして昔話はその痕跡である。

7. おわりに

本来自然の側にある山や樹、洞窟や淵といった風景に意味を見いだすには、文法が必要である。その文法によって自然の様々な特性は解説され私たちの文化の側へと取り込まれる。そしてその文法を人々が共有することによって意味が伝達される。その文法を知らない者にとっては、それら記号群はすべてが無

意味で、虚構に思える。民間説話が荒唐無稽なしるものとされるのは、私たちがその文法を共有していないからである。しかし当事者にとってはいかに重要であったか。それを認識すべきであろう。と同時にその文法を解説しない限り彼らの「場所のセンス」も見いだせないことも。

ここではその文法の一例として民間説話をあげた。いわゆるフィクションとされる物語を。私たちだって、フィクションを文法に今を生きているのかもしれない。そして文化景観を造り続けているのかもしれないのだ。

付記

本研究には平成9・10年度文部省科学研究費補助金(奨励研究 A)「民間説話の場所認識についての文化地理学的研究」(研究代表者:佐々木高弘、課題番号 09780132)および平成11年度京都府大学特別研究助成金(科学研究)を用いた。

注

- 1) ここでは主に K.C.Ryden(1993)における「場所のセンス」を参考とした。
- 2) 文化の様々なとらえ方は、石川栄吉他編(1987)を参照。
- 3) 柳田国男(1990)
- 4) 福田晃(1984)
- 5) M=L・フォン・フランツ(1990)
- 6) R・クック(1982)。J・ブロス(1995)。
- 7) M・エリアーデ(1972)
- 8) J・C・クーバー(1992)、252・274
- 9) J・C・クーバー(1992)、44～45
- 10) A・サミュエルズ他(1993)
- 11) 兵庫県教育委員会文化課編(1970)
- 12) 関敬吾(1978)では芋環型としているが、稲田浩二編(1988)では「針糸型」としている。ここでは一般的な「芋環型」の呼称を使った。
- 13) J・シュバリエ/A・ゲールブラン(1996)
- 14) 立ち聞きするモチーフを「立ち聞き型」、ここでは伝承されていないが、娘が蛇の子を鹽や俵に産み落とすモチーフを「たらい子型」と分類している(千種町の事例および第2・3表を参照)。
- 15) 大林太良・吉田敦彦監修(1997)
- 16) 井上光貞監訳(1987)
- 17) M・エリアーデ(1969)
- 18) 兵庫県教育委員会文化課編(1972)
- 19) 大屋のむかし話編集委員会編(1983)

- 20) 関敬吾(1966)
 21) 一覧表の参考文献は以下の通りである。
 1,2,3,7,8,14 は稲田浩二・小澤俊夫編(1978)。4,6 は谷垣桂造(1971)。5 は兵庫県教育委員会文化課編(1970)。9,10 は河野さちえ・万木恵子・立石憲利編(1983)。11 は東京女子大学民俗調査団(1972)の「採集昔話題名一覧」に「蛇智入・亭環型」を6話採集とのみあるのを参照した。12 は関敬吾(1978)、28。13,14 は柴口成浩・仙田実・山内靖子編(1975)。表の娘の家で娘とだけあるのは長者等の特別な家の娘ではないことを示している。単に娘とあるのが多いのは昔話が社会的権力の機能を失っていることを示している。
 22) 下原重伸(1970)
 23) 松前健(1986)
 24) 「播磨国風土記」『風土記』、岩波書店、1958、321頁。
 25) 千種町史編纂委員会編(1983)
 26) 吉井巖(1976)
 27) 岡田精司(1970)
 28) 川上順子(1995)

引用文献

- K.C.Ryden(1993): *Mapping the Invisible Landscape; Folklore, Writing, and the Sense of Place*, University of Iowa Press.
 J・ブロス(1995):『世界樹木神話』、八坂書房
 M・エリアーデ(1969):『聖と俗—宗教的なものの本質について』、法政大学出版局、39
 M・エリアーデ(1972):『神話と夢想と秘儀』、国文社
 M・L・フォン・フランツ(1990):『世界創造の神話』、人文書院、24
 福田晃(1984):「昔話の発生と伝播」『日本昔話研究集成2』、名著出版、7
 兵庫県教育委員会文化課編(1970):『小代—小代地区民俗資料緊急調査報告書』、兵庫県教育委員会、136～137
 兵庫県教育委員会文化課編(1972):『千種—西播磨地区民俗資料緊急調査報告書』兵庫県教育委員会、156
 稲田浩二編(1988):『日本昔話通観 28 昔話タイプインデックス』、同朋社
 稲田浩二・小澤俊夫編(1978):『日本昔話通観 16

- (兵庫)』、同朋社、17～31
 井上光貞監訳(1987):『日本書紀 上』、中央公論社、211～227
 石川栄吉他編(1987):『文化人類学事典』、弘文堂、666～667
 R・クック(1982):『生命の樹—中心のシンボリズム』(イメージの博物誌 15)、平凡社
 J・C・クーパー(1992):『世界シンボル辞典』、三省堂
 川上順子(1995):『古事記と女性祭祀伝承』、高知書店、105～134
 河野さちえ・万木恵子・立石憲利編(1983):『大屋町の昔話—兵庫県養父郡』、23～24
 松前健(1986):『大和国と神話伝承』、雄山閣、222
 大林太良・吉田敦彦監修(1997):『日本神話辞典』、大和書房、296～297
 岡田精司(1970):『古代王権の祭祀と神話』、塙書房、290～297
 大屋のむかし話編集委員会編(1983):『大屋のむかし話』、大屋町教育委員会、202～207
 A・サミュエルズ他(1993):『ユング心理学辞典』、創元社、170～174
 J・シュバリエ/A・ゲールブラン(1996):『世界シンボル大事典』、大修館書店、81～82
 関敬吾(1966):『昔話と笑話』、岩崎美術社、67
 関敬吾(1978):『日本昔話大成2』、角川書店
 柴口成浩・仙田実・山内靖子編(1975):『東瀬戸内の昔話』(日本の昔話 12)、日本放送出版協会、91～92・23～24
 下原重伸(1970):「鐵山必用記事」(谷川健一編『日本庶民生活史料集成 10』、三一書房、548
 谷垣桂造(1971):「小代の昔話」近畿民俗 54、27
 千種町史編纂委員会編(1983):『千種町史』、千種町、92
 東京女子大学民俗調査団(1972):『奥但馬の民俗—兵庫県養父郡大屋町大字筏』、167
 柳田国男(1990):「口承文芸史考」『柳田国男全集 8』、筑摩書房、9～207
 吉井巖(1976):『天皇の系譜と神話 (二)』、塙書房、184～217
 (ささきたかひろ・京都学園大学)